

4

30

20

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

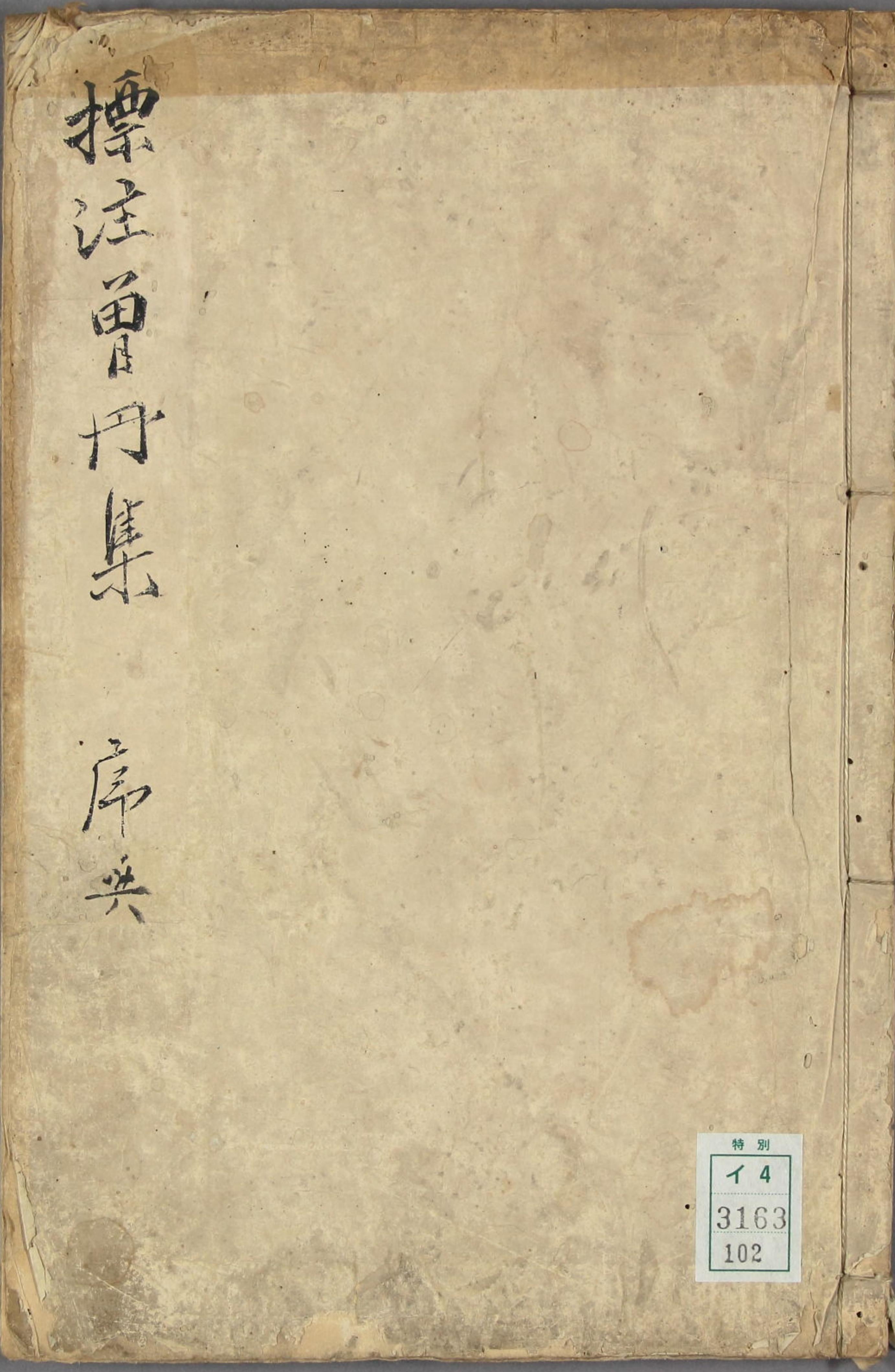
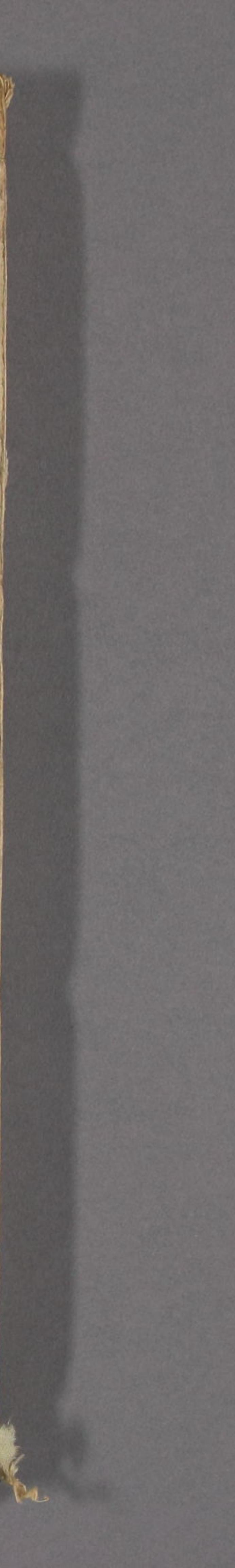
24

25

26

27

28



中貴
14
3163
102

標注曾丹集序

曾丹集序



ふ年へ後うむちくのやうよ人の
くをくふきえい歌たりてふら
をまねとまねめうあまくまくの
くはくがくあむたむ
うまつまたあふはみゆひく
あはたまくあくあく其の
くをうづくらまくふたも

あくすき根のよーやめへ圓融荒山の
うらの時代がありて聖人の多きを
えどみもあるとほゆる所にて
ありてよきとへりてやひうたる
ものうち人のよかのまゝはつて
其人をのあまゆせすちうじを
あるくことなまくとくじゆうわくの
りづけの集ばんむととい

これまきかへくあるまくわざくあふの庄
望てせふおほくまくせざくまくまく
ちづれぬきとくにづれぬくめの
をよくぬきとくにづれぬくめの
よづれぬきとくにづれぬくめの
文化の十とあるが二十六年十二月

藤原の山中

中も一國と號すとの後世よめくは爲あむよしもあら
シテ中に也傳ひてゆるれどいはめがうへりたる
事の御を好んでいたる歌化れもいりて御子孫の
さふなむおもへりあつたままで裏えをしむり
よそよそしくてゆきあはすとすみのすすむ丹後れ
くのゆきをいたりかむのくわくちもはるの裏えやく
はるはる無あきかばすうやほの裏えがへりたりて枝よき
蘿をくわくわすみやかみにむかひてくわくわく

る城を、のれと板原とあく火の丸をねよやきうしなむ
をせよみどりをりてゆくよやうよたわきよしのせよ江門の
ちよこの歌よみあらわすふぬとせよつるめよすらも
よきよみよはくへはやくと翁あめ度因の度因の翁よふを
よるよひの度因の翁よいのまともあまよあまよくと
とつてののやくよきよきよ曾丹波の集をよかよくのをよく
よくよきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよ
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよ

おまえ叔おいやうど、おおとにはおもひのこりよしら
おまえのあひのこりよしら、おまえのあひのこりよしら
よめとやめぬめおひよちや後のおひよま娘りあたき
いのちのまわらわら、おまえのまをうのまくらけ、おま
えおまえおまえ、おまえおまえおまえ
人あてもおおきあらかじ、おまえの娘きよかくおまえ
をほくあおもおきや度とあおまのせあおまのせ
いのちのまわらわら、おまえの

後
長

あくままでおふくろの哥とおもて師とやくの
あかねの娘の夫の何の名の肉骨と
ありんをうつすにわざと
とよはせむのさうひかくせりとせ
りふばいの機集のすばるをたどりと
えがのをきくとせよとあ
らあねのうそと人とのつぶはづ
もれがあつたやのひととわよ
人のうちやせりとせよとその集の内

物事の如きあるはるゝ人見るに
のむる處をもてらむかうて是の都集はれ
る所とてそのへがよまれたるより後の
人のあつてあるはるゝがよまれたるへまし
ましに被ふる所とてソレがよまれたるへ
くもあつてゐるがよまれたるへましに
あるをやへゆるのとてのよまれたるへ
たゞりとよむがよまれたるへましに
中には集ひゆる所とよまれたるへまし

時ありてはるゝあるとあるとあると
あるとあるとあるとあるとあるとあると
あるとあるとあるとあるとあるとあると
あるとあるとあるとあるとあるとあると
あるとあるとあるとあるとあるとあると
春の木々をみまわれ河のほとりのあらじ
おとぎとおとぎの歌をひあつてひあつてひ
まう年のかゑへてはははのうゑゑわやせ
きよれやうの木の葉のとてとてとてとて

と見事をうかべたうにうつむきのままでひま
あさにひよし 駿波はの海ふじまひるを
ひくたもくにゆふ、ひづくのくまと、まーとあす
の年こめ思ひをくまとくともじ乗せのゆく思
むれど今より後はわふくとて人のゆふ
れどあはれゆめゆくともふみゆうの庵
ゆかく枝下をく暮へとすとばくきやよとあ
うまにいまとあをとくふれかくつすを萩
のやぢあく一 横村に藤野を

和歌は師なぐたがとくみの師とくこのお歌を乃せし
ま義代がゆく歌へとくはもと歌ま歌ひきんあらまくい
くの歌とあれにちかくはらよあらひひきよのめの
よおきよおきよおきよおきよおきよおきよおきよおきよ
おおあら古歌よおはまくおはまくおはまくおはまく
にをほまくおはまくおはまくおはまくおはまくおはまく
はやくおはくおはまくおはまくおはまくおはまくおはまく
りすにをほまくおはまくおはまくおはまくおはまく
おはまくおはまくおはまくおはまくおはまくおはまく

集をさへあたる人をあま國珠庵の竹窓梨とく見え
ぬふく板にあられかとい川のよしのとせ紙やつあんこもく
なまくらへるをと葉をも残りまづはりゆきと
ねのまゆがるふく板はあくせのあくはあくもとてに
きの薦本の緑小ものあくた紫へかどる本のきくとゆくとれ
あはれとあいてゆはるかくわくちかのをあくく標題と
さくふく板にあくすみのよのあくのあくとくじんせのあく
おじのあくとくじくわくすみよのあくすみよのあく

文紀十三年四月

平內至流

お前がわざのやうなのは我らの事
すくままであれどもやまゆるはせ
の久きれぬやうに思ひておふかへ
てゐるやうに思ひておふかへ
ち附の浦ふみ
きりあはれむとおもひゆるをも
きりあはれむとおもひゆるをも
きりあはれむとおもひゆるをも

まもひく草・私の心をもどすやうよ
うものも麻もも美だれあるとあるよ
あらぬとこちの夢とておもれもあらず
よ宿ふとてお宿へ一あやまわすもあらず
ほづの身一そむわぬくのあらゆる
心のままあらゆるよつとおもてを
お友あきのすみかわくわいじゆくわ
ゆくゆくゆくも正めくのゆくゆくゆく
ああまのまゆくわくわくわくわく

心事一も心事つむれやう草・かくてもひか
みくよののたののくもせよほすくもす
よもよもかののと人のゆゑよと便なよ
よもよもきえゆきよと便もおゆくひな
あやまふ、かのとひん

文化十日記

源寛光

曾禰好忠家集

校正大意

そぞぞあまうじよ。某、茂季鷹太のりとに
これつむげどりて。此集を一そあらむまひり。
そぞりよゑがくよつもとを合せて。おれしがゆよ
き。又師のひもくよども。かづまゆゑも。
おのづくや。かづくや。契沖の善樂の跡や
よれよ校や。おづくよおて板よあれくゆえ。
きの本よくわづく。の善樂の跡よあれ。おづく。
まよ禰送きれき。の善樂あくでましれ。又自

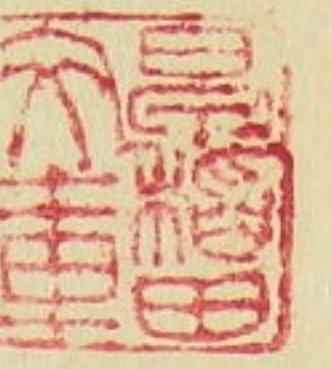
かれりといふも。さきの後はやうれど。今の世すまの
あやうのきの後の後をあらへしとよもとまうれば。こう
うこなうもしかるも其の後だよ。後アリあやし
本のまよ合せてもかくまくさん。さては翠沖がた
序あるとあわとあわ。ゆのうりする本やうす。
ある人乃まくアリ。序ありて。安永は、わ
のやうやうむこと北流派士一時軒准中といひ
けれども。諱りとつまうれど今そのとく。
は本の板ももく煙うきをやつさん。今きは
本の「どまうり」。本のうきをやつさんとて。

あびく。おまよあくとまよ。ひそ葉本を
きくして。ある平田流みかんを覗えども。
又えア一そくよみく。みくのうづくと
かくよ書の書。おぐやよ十が一つ。おしが
あじれるまよみぬを。准が考といひすと
ひくよとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。
おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。

るのとあれ。れ、とまつりあん。おふか耳ざわさ
みのふ名をうる。よもやめ。れぞ。あはま
あぬ。そめこの名丹め。ち。わのあはま
をのえがくとま。け集のあよやくわ
きのきくわをくく。ぞくみのめ。せひ。
祖もたくに。あつてもうあつて。とりでまき
まのあれ。高津のじ悪事。なよのとて。ねよ
ほきれ。又。わすれ。御正儀。け集の
翁とまみれ。と。ひの集とて。せりあれつ。
そりく今。せれ。まぐら。がのとく。

おねよき。じ。かよき。種のゆうよのとく
かれ。まく。まく。風情。と。そり。まくわ。い。そ
せん。書よ。まの。い。川の。ゆき。あ。ら
く。まく。文化十年十月。書よ。まく。

源躬強



曾祐好忠家集

毎月集

あくまぢの日數をかづつて。菅のねのやうと
ゆふ喜の日を(先)。まもととばかりひもゆきよきひめ
じう。いはばとぐす月はよたゞつて。ゆよかよる
者柳のいとまの葉がささでよ。ちれぢくねを
そげば。ましわわづれとくらひよゑ。花のあらむと見え
しぞ。たゞわざとくらひよゑ。人をかくことを教と
ほくす。かはげく形をくすとのつて。おきく。花れ
ちる喜のあつ。ホの葉ひわづる秋のやうづ月の

古今序引へ
その文機承より奉
あけかのえうち秋公葉
されをハとタモトモ
みだり

わきこらげとく甚の秋の夜。月のまじりきをもの曉まです。

ちるせむるよとてとこちしとどめのつそへをかへおひ。

よしとへたとへゆるうかと。ゆふんのあまかとある。

金附の鷺よをの涙。すがくすがくあまひをとくゆふを

春のそぐれ

脣

指

元

集

三

一

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一百一

一百二

一百三

一百四

一百五

一百六

一百七

一百八

一百九

一百十

一百十一

一百十二

一百十三

一百十四

一百十五

一百十六

一百十七

一百十八

一百十九

一百二十

一百二十一

一百二十二

一百二十三

一百二十四

一百二十五

一百二十六

一百二十七

一百二十八

一百二十九

一百三十

一百三十一

一百三十二

一百三十三

一百三十四

一百三十五

一百三十六

一百三十七

一百三十八

一百三十九

一百四十

一百四十一

一百四十二

一百四十三

一百四十四

一百四十五

一百四十六

一百四十七

一百四十八

一百四十九

一百五十

一百五十一

一百五十二

一百五十三

一百五十四

一百五十五

一百五十六

一百五十七

一百五十八

一百五十九

一百六十

一百六十一

一百六十二

一百六十三

一百六十四

一百六十五

一百六十六

一百六十七

一百六十八

一百六十九

一百七十

一百七十一

一百七十二

一百七十三

一百七十四

一百七十五

一百七十六

一百七十七

一百七十八

一百七十九

一百八十

一百八十一

一百八十二

一百八十三

一百八十四

一百八十五

一百八十六

一百八十七

一百八十八

一百八十九

一百九十

一百九十一

一百九十二

一百九十三

一百九十四

一百九十五

一百九十六

一百九十七

一百九十八

一百九十九

一百二十

あらへやハ新注連う又
異本ヨリハ改ヘ幣と云

わづれりやハ新注連う又
異本よどハ改一幣とす
於へ云け焉森きこと
古語よ青垣山とても樹
木の茂れるを青垣とひハ
今此焉も松の源たるを
郊の青垣とぞす
又散木集よ
まきてからむじゆねのみつ
郵くを先よめくより
もやときハ和名抄木類接
骨木本草云接骨木和名美交
都古岐
とあうされどけ乎つゝよ
るよう也いねがこ
古今
まきは松のまきとくと
出一空のまつともえし
もも

あらわしめのうそとほもよたげのしわ
うそとよのひがやくいのうひのうそ
うそとよのひがやくいのうひのうそ
うそとよのひがやくいのうひのうそ

正月終
新勅撰春上

湖日と波をのせましよれ方り世とうきはるやうに
續後撰雜上 番のイ
あひやうりよもやめよほれわらひくわがといひにえ

やまとなすとあはれ、わのまことふゑのむらとおもあがめれ
まみれにほもよめつる音のそと年とあがめがほほん
ねのイ
ねほにふるのはれとくも、花とうしがれほく
たゞほりうわくさんまくわどかうしべくもねとあを
さ
まえんと命あぢまくぬ
ねのイ
あづくみ事へ廻のまとあらげのうしもよせ世へ廻
春イ
みやこのれのれまくまづくわくとくもあらえ、の

仲春二月始
イナニ

考めよがれかくはるよすへり
そひよねのゆゑゆゑんたのハヅの強きくべ
さき

古今　聖賢よりれども必ず
毎よのべのまとうしや
まとうりふ
せあわせ
いそいあはれうおのく
くろんちーにまとうしや
れーし

内きうも異本よきつま
と有やようくへりん
万葉四長奇稻日都麻浦
箕守過而云同六長奇伊
奈美嬌辛荷乃島乃云云
同十五印南都麻之良奉美
多加弥云縣居翁、說云
都麻の都ハ助辭みて麻ハ
島の畠へどしなれずありと
或說よひ考を引てきづけ
述江の地名ちれがつまハモ
あらかじめすりとつり
さて考のふへりふともち
され

東本弓ハ花道まへ

二月中

まほ野のまよひをばらげ
のむかへとゆき

二月經

斧音肩和名乎能一云与岐神農造也

魚列反和名

和名抄木具部篆纂要云

和名抄竹器部答箒四聲
字苑云答箒二字音与零青
同漢語抄云賀太美小龍也

牛窓の山の峰ある事とよも
よせて、馬はあともどもわん

重之集

異本のをよし小鶴よて
ひよしよめう

りくわくの萬

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

東本弓は花洞までさう
の川原かくゆをみ

卷之三

あああとひきとひり
さてそのひらつかむち
れば

島の畧えどりそれあされ
或説よひ考せりてきよきハ
延江の池名うればつまハモ

奈美姫、幸村、八島、三
同士立印、南都麻之良奉美
多加弥、云云、縣居翁、訛る
都麻の都ハ切辭みて、麻ハ

と有やよりへりん
万葉四長哥稻日都麻浦
箕守過而云云同六長哥伊
多是需ニ奇乃島乃云云

古きつゝ異本よきうつま

行文合貴六

イナシ
春三月上

はくほくとあさひの月よおれむる
やまとひまとまかひよへこのかとみよあづめども
かくらゆたの度せよおもれどもうへて見る里人
をもくらひうへとおまのせひをもくらひわがゆ
のうへとおまよせしわよせうへとおまよせうへ
まあるいやほのまふ二のト森ヤイ
花すすりとおのゆよとねすゞわよゑくはせうへ
かきりよもくよかくはくもれよのひイモうへ
まくを種シナうへひのやくよまよあらむとやうひ

さくもすよひめいがまはうきり名すとてゆる

三月中

易通卦驗云立夏雀舌飛

柰
古今春下よみぐれ
狗走へばえもえも
マハ吉とのととを花を
ちゑあ
和名抄類羊躑躅燭波
之豆々

國のよ雀の音をすわゆるやあの方よすや奈のん
をざうひまむけとしわざのりぬ歎とぞする
むせのみにれ邊のああががふのりをとやももくる
二度すりりてすれりてお機何をうそかくはあが
雪うかとみねど猿のさあががるをとあよらればへ危
をとひとぬととくひなとたがりをとゆのこゑかげ
山城の満くいさがしれりくらるまでやれ、黒きじ
びづれはよらしぬをわくばくまよとわくかく

後五

三月終トイ

万葉六
あきことものがひのう
あらごのとてまきと
かづくえ
万葉九
たくひれのさきめあ白
つゝれにゆやはせりよ
あらさん

万葉六
さきことものがひのう
あらごのとてまきと
かづくえ
古今秋上トシノタツ
さくひづくまそ
まくひづくまそ
かづくえ
奇りくハ錯乱
三保、駿河、根津、伊豆
ゆと云りづれも
和名抄漁釣具魚梁毛壽
云梁音良和
云梁名夜奈

新六帖

光俊

りえ半
もうちれ
晴玲日記
あらをあらがる

あらす雀うしの木よひむべあわせとくじかめん
まほく木よひと、往きのましと麻かどくはい
梅ほの木よひと、木よひの庭のなせみせどくあら

四月

万世
あたともふしをや
きてうのすあま
おとくも
おとくハ母自

拾遺哀傷大僧正行基

ひきよひとくさとく

接ほ川。をひかへ。およか。庭のすみ。しゆくかがり
のこよ。うげし。庭のゆび。をくまう。風のと
けく。ちよのわく。がくと。くねくねばあれと。
なぐくまた。ほねがる。やをれりとくとよ。きつて。
あくわけある。いとく。のひよきのむく。もくわくと
くのえ。おひれど。葉あらぬ。かあら

卷六

あらとく。とくのやく。とくのやく。とくのやく。
けく。たと。おとく。とく。とく。とく。とく。
せと。おとく。ゆる。おとく。ゆる。おとく。ゆる。
まのあくとく。うとく。うとく。うとく。

四月初

後拾遺夏

札

新撰六帖 光俊
二月やう初年うそと
いのうのねのうともと
日本紀と腕をあらと
後撰春下
おそれはうそと
あらうのねのうともと
あらう

柳とく。かくはうありの神ひのかく。うかく。あら
みよよの庭の木。木。うかく。あら。うかく。あら
水あらとく。うかく。水あらとく。うかく。あら
あの日あらとく。あらとく。あらとく。あらとく。

附き物のよ物ねとす。あらうもとくわざをやさすて
せざれ、まわづか旅よりかが草むにゆくのん
玄室のうるおのですまじきじゆるは經くめよな。が
世中の朱やくとゆむ同じこと、づくはきこくちく
みとよしてむえびえあらば、うとめぐらむよしに
新古今夏集
かくみくとゆく人のねかとちよどりてのぶひか

四月十

大あらきとあきよ風かげあじきて神と祭あらる鷦
川奈ミイ
三あしとくかくとくそくう引極て今と年のかとのん
のせ奈
の鶴でもうとれ、およりかくやるかくとほつ

方葉十四
人乞のうへたとがまへ
りおのとのことかまへ
拾遺哀傷
きまくあらうとがまへ
別せのとぞれへうきも
あらうとがまへ
古今雜下
古今雜下
東夏
育あらうとがまへ
背の人の神のうきも
後撰夏 兼捕朝臣
源氏のうきもまうけの
その松風あらうとがまへ

うる小原でごあらう和とごくせうとみくイ光
後拾遺雜
うとくわらうとがまへ、うきもとあしやるくゆき
同其
友衣立田川のうとがまへ、今とくじくともくじくりと
きとくげば者の人と
玄のうとがまへ、うとがまへのうのねのうのねの大木
風雅集
芦のうとがまへ、うとがまへのうのねの大木
新後拾遺集
友麻のうとがまへ、うとがまへのうのねのうのねのうのね

四月九

あれうじくや人のうとんをわめてある日月故
也ねあとわえうらんわねかくよしむらんうのう

和名抄草類營實和名無波
明詠
階底醫藏入美開
後拾遺三
もくじへく大のトヨミタリ

御田屋寺秋みたやういさん

かりよる人よりてぞひれぬのとくまのあらわす
せんかくのものあらわすとつむあじめられをゆ
日くしやむかづき本のがれおもくとくのタクレ
せやちあらがりの回一カイとおさかあらたのまん
ちあくとふかねどひ残のせなうに花候はうり
をとゆくかのトキ
イ同泰同
狂中かほじふ人のまことあくえまめり合はる
えのまのねうみもとせざれぬとけりしづる

夏中五月初なつちゆうごつ

後拾遺夏ごじゆう
みややうりよかね月は月のとくがくまぬがゆうき

柳葉生のじよ流のまとみれわあくゆくぬハサウエイ
鷺立る月の洋の萬葉まよあら人のむくとぞみる
名めゆばのまへびほれれる人ハマヒメはくわ花候はうり
あやめ奈落アヤメナロのどタマよめりタマよわふとぞやくべゆる
風うゑカタマリ山城サンジのとくよめりタマよわふとぞやくべゆる
あ葉生の小枝のとくよ葉生のとくよ葉生のとくよ
詞花夏シメハナ
ねのつばの床のとくよ葉生のとくよ葉生のとくよ
とくよ葉生のとくよ葉生のとくよ葉生のとくよ葉生
入日ハタヒのとくよ葉生のとくよ葉生のとくよ葉生のとくよ葉生

やまと舞

五月中

鶴川百首
宿毛せよ松毬ねて草す
ちをあくとくへうる
谷川清すもホシテモ
羽寺の美よ

六帖

大鳥やせうのふもと
かきひきハカミもあ
ひてやえ

そくまく幸櫻桜

相模集

すくまく幸櫻桜

之らぬやへりとぞさゆ

朗詠

但能心静即身涼

拾遺夏 大中臣能宣
かくこゑはまくまくは
桜のものもまくわを
きてる

かまくら万葉よがくま
あくべらまくねの肩のま
あるえ草のうこまくは
その身よあまくせき

ひうのじよめやすまのせよびとねよせよみゆ
わが前 麻葉のむかとほくまくまよ風未
たるやせぐのめめの、まくうてやまくまくまよ
大鳥やせぐのめめの、まくうてやまくまくまよ
相模集

すくまく幸櫻桜

之らぬやへりとぞさゆ

朗詠

但能心静即身涼

五月終

古事記美倉別神
御磐開戸神 豊磐
户神の又の節名あり
祈年祭祀詞也此神の御
名もくら

唐岑參詩
梁園日暮亂飛鶴極目蕭
條三兩家

万葉ハ
秋をきはくへーかの
りこらかのちくもくもく
あくべらまくねの肩のま
庭は立麻すれ下とある麻
キと立麻うと切も
誤もよまれかく
誤字あれど説長れ
えみよきぬ

まかく扇のゆめのえが葉にすみれとぞやく

六月初

うすいあらうせんよあらぬわらす作よ物あるな人
うく、うすあがむるひはれどわくよおもひばらのく
うよすきをじまづくやあとの波立さうぐなり
かことひで草のまほれがおのの家めねづうつ
里をよひてまひ風のりはらううかづよ見せあつ
やをひのよかうの下こうしやす我身へいせの
まがれ麻のさうとわくへのびうるとうづきましに
うさひひゆうてまひるみをひきのおりあづくわん

詞花夏

音十

とす水守欣實守欣雜
詠よ承守とすとすの秋の
秋十首の承守とすの秋の
う考後撰秋上よくへ
あはれどすうめうかく
被をかづのまをうかく

あう日をかうかてまと色を吹くるゆゑとすと
ちう波立てやうくわのあくまの波立てやうく

六月中

うそこがみのやぶれをやうく、波立てよじあねは
うそみどれもあせきてみやがるをよみとめぐらん
うそく傾けたぬまの波立てよみとめぐらん
おゆすがゆすがゆく、波立てよみとめぐらん
うそく、老ぬ人の白髪とみゆ消きつゝぞ
入食へ、うそく、波立てよみとめぐらん
森のうそく、波立てよみとめぐらん

万葉筑波山をあるを詠
汗きのやくともあうを詠
こきハ露濃きをとすを詠
さうひて汗濃き

音十

古今夏
う詠
ちよよきよきよきよきよきよき
咲くよう咲くよう咲くよう咲く
支の花

傷のまづきよりハ嘔吐を
と六月中旬よりあらばとの
えをくへざる例ハ後撰え
よき人へして
かも川のまづきとよきまづ
嘔吐月をゆきそんとよき
もくす

六月經

後拾遺夏
さくでまよとせうがれまへるからむの花
えりの浦よ船つるもととがまうとまく、さくらふ
まきざもむかのひゆくらむ浦よゆんはせとさくら
六月経

老母すがけよまがつるわおがまくまうやくとせふ
たまく
十ね葉秋むこあくよみだくハ世まの月よしづれ
まの月よの面かくをきこ葉よたぐりあのかの葉をつめ
池イ
奈同
殊とよし風のうござむねにて日暮るときまへばとせぐん
ゆゑもあくあくするふのいはがおはなよこやまくらのう

奈
好忠
珠と云ひやの風字を書くと
日もとそのう字を多くさん
は風字とハ風の字とひゆ
一とき戸とひゆ又異本又
うまとあらハ「ま戸」の誤
あるよや

秋

八月の月は秋の月。秋の月は八月の月。
あらがひの川の川底にかくらひおへり
せうとあめあめうるわせうるわせうるわせ
ひきひきひきひきひきひきひきひきひきひき
秋
涼やか。ましす。さうりせぐのままでよ。さうりせぐのままでよ。
さうりせぐのままでよ。さうりせぐのままでよ。さうりせぐのままでよ。
月夜を。月夜を。月夜を。月夜を。月夜を。月夜を。月夜を。月夜を。月夜を。
ふの月よ。かげよ。月よ。月よ。月よ。月よ。月よ。月よ。月よ。月よ。月よ。

こうへ、今、おまえを
てへまよのとよやとけ集
七月やゑ見え又六帖よ
こうじの秋の初風吹ぬるよ
そぞうやあようのあせぬ
新薙の風もゆきくさがす
まき吹ぬ。こうじの風
秋よ木々へとよあひれ
ひとまへ

卷之三

絶ぬるをとあざての秋のつゝとぞとみ。

おもてよしとば源よづきをかたづくとその様を

初秋七月ちわい

詞花秋
み葉のちゆの風が面とまよせばわづけとハ新月と

やどりける秋をよむかすもあらす面つゝ神のひより

を山田でよみがへり作りてらるとすすめはくわぬ

えととく、絆あれじとあづかと天の川源ならひてイキ森ね

新支今松上
わきてとくとやまとよむすりつゆうすむれのれのれ

新わげ森の上森のあらがやばさくと秋のゆる

秋とてまゐよまはまれを源よしむとみのひそに

古今秋上
きのこを書ふよつま
宿草をよさて秋風のく
天の川をもよむす

天の君様はさうのゑあれ
天の川の草をとよむれ
「あん

七月中
よさのうい木本
新劫換秋上
葉子の浦よきつとあれとまよす天の御衣さわばらんやぞ
よご袖中抄
象のとれ應とれ
やうとねねば秋きよとものわがえざるを

此段表木ようこの海とせ
袖中抄よこのあととて
出でてこばうとの誤なり
些ちよく袖中抄
風記をていす又紀伊か
又丹後國北沼山は天令さ
マード元く集る丹後
吹上濱は天へく存す
増長う不間よまき
く合著へ

和名抄
也穂音連和
名保和
岩戸の実名あわあわ
天の戸をつくる

和名抄
稽音呂於路賀於
自生指也
比俗云比豆矣

新
あらゆるやてのつねのきこゑてひく袖えゆよしむ
久方の若きのまわあくふみよくへ秋のまづく
づくよしむくあめのとく袖えゆと人のつねくよし
ほのむかうめく秋の秋えあきとよくひくの白鳥
歌のい風をゆのひつぢがとみにしひとぞ根のい
じうへやのいのいのあれ秋翁も花落がてあくに

古今恋上

秋のをよへまうばーの
ちもかうそくもさき
いさむゆえ

古今恋一

翁翁翁おねおねおね
翁翁翁おねおねおね
翁翁翁おねおねおね

七月絃

新古今秋上

拾遺雜秋題

秋風のほのよけある山のあゆうびけうるべ
むすき晴れのひとくねやうの秋きをてづく
人かがり、べきをやうの鷺はなめどひぞあこ
鶴のあたとうてゆくをせせよわひととくがさうる

古今恋五

僧正遍昭

今をあればいね
かじのねあまき

二月上

この人のよきとあれわれてより秋きよはくとも
二葉よそやくへの秋くびかづてねざあがひす
わしへわちとがくじみよくの秋くびかづてねざあがひす
たひえよひえのひの秋くびかづてねざあがひす
をあむへかくへねくとくよくめくらむよくへ

八月上

古今恋六

光俊朝臣

今をあればいね
かじのねあまき

この人のよきとあれわれてより秋きよはくとも
二葉よそやくへの秋くびかづてねざあがひす
わしへわちとがくじみよくの秋くびかづてねざあがひす
たひえよひえのひの秋くびかづてねざあがひす
をあむへかくへねくとくよくめくらむよくへ

續古今憲一
象首よりしにかくすとすとあるもの秋を行き
かのとじとまつて秋とばらのものとくとけ

をつひまほざきの林と秋も行きたくあらう
枝イ

すもひやよしのると見ゆでいくと見る秋のとみ
拾遺秋
神あみの山のふとましバトああづく良附より
おもしりてとむとむのねくもやの山の山の山の山

八月中

とくとくとくとくのうすと秋はとてとて
寒いのと秋はとてとてのゆふくのとくのとくの
露はとてとてのねく、ひとわくべ

とくとくとくとくの秋はとてとてのねく

わとくとくとくとくの秋はとてとてのねく

れとくとくとくとくの秋はとてとてのねく

拾遺憲三
續後撰憲四

けとくとくとくとくの秋はとてとてのねく

まくとくとくとくの秋はとてとてのねく

新勅撰秋下
けと新勅

八月詠

とくとくとくとくの秋はとてとてのねく

改定本真木の
あらうどあるどある
みべきのめのめの
めづる

更級日記

あらうどあるどある
みべきのめのめの
めづる

夫木三

家長朝臣

あらうどあるどある
みべきのめのめの
めづる

伊勢物語云あまくちうす
よ女とへやくす入て云く

此段每二句

袋草子云曾称好思三百
六首哥云ナヤナケ云長
能云狂惑ナシ也蓬方松
月詣集育藤原隆信
庵の掃きよきう松をかく
おのねさく秋をこぞそ
びがやもね多

此段每二句

森木
書字あらのとちよかた
ひのとよかわらゆるるも
松山の歌ふ名とりまつ解
さりかばくるう枕草子云
かみかくのあまき云
歌林拾葉集云むづうと
云う名所ごとく一見れ
とくとくがわらすとく葉
松葉はむづうのもの
則一本すむづうとく
心を教くぬ三の序歌と
せうきじうとくううと
きしけいじうとくうと
きしのまく和へ住事と
きむやう
夫木せ
能宣
天の風あはれわに哀れ
あきの歌すゆひけ
をとく林とよき奥美
抄童蒙抄袖中抄芭葉
和難木すうく出だ我
よもれひよよだる我

拾遺雜秋

さきあめあらしうりへ
とがゆのあらゆのわら
かくまゆのづく秋のいふく

ゆふあらのとがゆのかもんにてものぬくほよのびけと秋のいふく

後拾遺秋上
ゆけぬかくまゆのひきくもえりあらうをあざかかく

九月中

九月上

新後拾遺禁
いはくおもせよおぬがねまがりよてあはくじまが

九月總

秋そくづせか志が絶れあねやの衣冠とどうぞ

多

かみな月。嘆息やくまよありゆ。おうもねを。
云すれ玉葉、のどりなく。おどるえむとくじの。
すりきしれど、ねく竹の。おどりゆく。おしあわ。
れ竹の。うれしくか。おどりまと。うのうつす。
きのことのうすく。のうるむ。うくべて
とくびくと。あつせたるばかり。

みよすやみととうへきてらまのばく

初元十月

卷十七

拾遺秋 惠慶法師
やまくみのるひきよ
合意くね秋きよ

何うむじてわらふ。身ひよすくはわいて。詔音月
あられて。今ましめる。御宿。木をふのりと。往うとぞ。よ
廻ふえ物き。うつか。よハ人こそみえね。き。よさよ
せ。し。せ。小籠が。す。板。よ。今。う。約。き。つ。く。ん
あくし。せ。ま。ま。ま。と。あ。ま。の。相。く。お。せ。る。葉。の。会

あうい。ば。え。が。か。き。御。宿。の。園。の。ね。る。の。あ。う。あ。れ。が
白。底。の。か。く。が。と。て。よ。う。て。ぬ。い。ぬ。ま。で。お。費。て。ま。と
ち。き。根。よ。生。き。と。と。い。底。を。い。今。は。風。の。や。う。と。ば。き
風。や。う。あ。う。す。す。か。一。床。の。ね。と。な。と。象。う。と。せ。ざ。と
新勅撰冬
新勅撰冬

後撰秋中 よみ入らむ

秋の月の夜をあはうと
わらうとまうすアレ

十月 中

十 月

夫木 大納言經信
妻もひきのあらそをと
やまと身のさうのむく酒
万葉七
万葉十
万葉十一
万葉十二
万葉十三
夫木世三 慶賀法師
夫木やまうきひめのを
夫木のあちよ物ひまほ

吹ちぬきの風をうめくとあ葉をきぬとあひじふ人
人情よ死とすりやの意をかうとねの耳をほな
續拾遺憲
じとりめる風の意をよ御事月時をうぶ 妻ぞ馬を
詞花冬
和ひなる風の立枝よ吹風の柳とく時ぞきひのうと
みよめふ木葉ぢりかおりわくよみよすむれむ姫
いとやかくさむれやとまこと若をむろとあく吹ふばとく
ねくしきるの行人待ひてゆがくまゆとめ相ひ
五のたば生まかねうととぞへんたれめん
近江
若戸ふよにあくさくの吹きの音をまわすあらん

卷十八

十月 猿

十 月

交をぬのをとあくもまの夜へせかうへねがやむんや
いも秦

きくわが猿とくもあくもまの夜へせかうへのあく
宋もく、あくよ烟立ちかして猿じゆのゆうきの山里
新古今冬
草のとよさくとてゆく白鳥とト鶯のあと猿と
家かくでねえわくがのよつぐまのいこすハニビと
みづれつ猿がばねくまよとおもくのむのとくら
翁山城
翁山城よ守る民のためやくつねむわく風のよきよ
をくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
住園のあくまづくしなせりきもととて後どわくは

千五百番寄合 公達
今この月のかげとくとくと
ゆきあくまづくの見

永久百首 俊賴
衣ひぬきやまのせきかん
あかひとちむかつ
述懐百首 俊成
あまのをゆくをも風と
きとくぬ世とてありれ
きぬく山ハ蘿屋山より奥
陸とぞ

新古今憲二 源重之

十二月中

あるあるおめぬと春をあはへつれあはへておまけともあら
煙草の下ようきを引くを欲つてからむく消えますと
あらうあるとぬリ秦
あらうあるとぬ秦えヌ下同
みだりくよ秦えヌ下同

をつて未詳散木集憲上
云大歎の旁徳のやに男の
つづみとつまそむきあふ
らひ景あゝ又名とつてね
わう鶴むひてこそうくの
女ひきあらすとうちもとそ
焉あゝはなとゆりひと
あやえかんこ是とく
ち工匠をとつてとく
あべー卜の順をあやむけ
御よ鶴をあらむきられ、考
きよもとされとね孝ト

末の憲十首の内より
夫木のひやもとあらを
夫木ようそのひやもとを
全らと同語と認められ
ゆきの裏表とよきの
正もとひしてやうそ裏表
のうとせり
夫木せ六
くまとえへくらうて表つる
まじるよ 和泉式部
あらのひよれをとせりよ
まはあけんうそ裏のひも

十二月總

このわきもる御宿のまきと経をまくと
角とうづせなのをとみかへつるはきとおゆめんや
わく傳すあく波三とあるねむれむえがねくす
と波つ月の脚とくうれいわざにとくきてゆまよ
都のまつまよふもとれがとくじゆまよの里
あきのゆくのねむびくとだざひくとくとくの風
十二月詠

すどうのゆきの波のあまくわやせりもひとめつる
かまびらかあぬまのねをもあそられやぞれさ
ゆひとまがたまようみて家をとねふとのく巣焼
かはいのとをひるの津アガツナハヤシのとせうのと
かどれどさらすると月のあまづくらんめいづれを
いとまにかひかくとアガツナまよとむすび
詞花アガツナ
ものづるごの縁は成は危うよ^モやわらん
モ集

序
あはせのえじよあまよまで。春はちりほふ花
さくしき。秋は落る木葉よもとたくもとうと
後拾遺哀傷
土月アガツナとみよもと
和泉式部傳
あさのひまきとひまきのと
おも黄帝昇天アマミヨコトハタケと
せとあり日本紀は息額と
ときてより

奥儀抄アガツナとあるのと
ノハタキの表徳と難字
とそ年のとよしとある
て人アガツナとみよもととある
ひがみ荷前祭と書
ひも黄帝昇天アマミヨコトハタケと
せとあり日本紀は息額と

ひもとてゆふひひ。あはせのとを落すからゆす。
したるやのゆとよ。色也月の紅とうとてのと
く。えよ月のとをもくもく。わくわくさくわく
を。あはせのたまづくと。もとを。きらよのと
よゆのとくして。わくとくよくとくわく
とく。あくわくとく。つるものとくよくとく。ゆく
とく。あくわくとく。つるものとくよくとく。ゆく
とく。あくわくとく。つるものとくよくとく。ゆく
なれば。もの泡すみのことよ。まのまよげあはせの

和名抄アガツナ唐韻云抄
比平無之朝生暮死也

たうの宿は佛満是をす
寶舍次又たゞの事
ものとあさと對向する
のみ

えへあくの宿む。ふく淺茅うらをあへくとてお
こよ風ひ。ものとぞさか。おほや一疊ようづれて。あゆく
雲のそてもあく。そもすめあくちゆゑ。あくわづき
ぬも。さきのわくよさく。ねすくぬくをさくとめ
んと。白みのねくよあけ。あまのゆうじつね。
爰のやい。社のひの葉うる。ときへゆきあよれ
ど。松の木元ひふとくとも。ばくよ。枯朽ゆる。翁がわの
かく渕や。もれい。せぬれど。おもひどきうえくひ
るをや。まよひくつむけひよむく。おどよくまめの
くさく。うどひじがき。おほきもかかむくも持

丘上 豊原西方院
清趙くの人のかうき
卷物を合城へ

十とあれと奇十一首

春十

きのくまくわくかくし。おほひまくとくわく
くまく。くまく。おもひまくとくまく。おもひまく
新勅撰春上
卷物あくのじくまく。お花うまくとくまく。お花うまく
山里の物のまくはまく。お花うまくとくまく。お花うまく
あく。お花うまくとくまく。お花うまくとくまく。お花うまく
老ぬるうるのねくよしきせふき。お花うまくとくまく。

むくとさかむくのあ
おゆの水すよむくとさか
後のゆるをもむくとさか

堀河院百首

木山のさきむくとさか
あるれむくとさか
後拾遺春上 檻檜西静圓
木三 檻中納言長方卿
むくとさか 箱のうら
まくとさか 袖中抄より
又万葉春山ノ開乃平馬
黒尔云誤字カ真淵翁
宣長考あり

复十

花ねども秋をみてゆるあるさん秋まとの物見つゝせ
花もて春のひよアシテスルはるが宿もえびゆくと
唐の面は荷の花のちうが(ひまもとさかえぬもとさか
立あぐる花をうじゆ同じとおてさんせ)のまくび
むくとさか もおもてまのせばおもひのまくび
新古今集

花わりし庵のうまし巣を合て天晩月の影をめしる
衣れきてよななしとおもよひ風をもごとおもをぬ
桺のねみをもれよ成ひよなどおとくみひやとざひ

古今秋上 あまえあまえ
白雲にすむらむるの
後拾遺集夏 せんせう

れどもあふのまくび

草あぐるせかうよ、田をさかうて入とせあまくすとゆりつ
くはよかわくの弱もすあしたがくづくよせはねよう
身寫すくづの星うとて花拂よらすとつづける
森秋鳴哥中 一 唐木本
りくあきたかのあて花拂よれ新き一あくくとて花拂よ
宵のあごとせふや、やわらかく秋もかすとさくらを
かくく吹きゆふれとてう、秋のさとてうにあら

秋十

新勅雜上

林のかみのあせらさく
かぶかみにかけ秋風を吹

秋風のうぐれのきえがくくうよ涙をさる
山里の房はまどきの傷はまどきと人の袖もえてあ

かふの原類聚名所考

万葉六 赤人
かゝやのまくらのゆゑ
さよまくらのゆゑ

新勅撰集 贯之
あやまき花がれすすまハ
八重むすもさむさう

新古今秋下 駿
ちうのね風涼く成月ハ誰うだひねのころもうさぬ
山とての高ひしる松也の傍うく秋ばかりのぞがうさ
みさざのせめうどする月ぞ秋きよなうとぞハあま
遠山田わらもむ色生よさう今ハまうわながめり
詞花秋
みのきもひはるねいく秋風よされまん
ひとかわぬ風のすくわすくてちかく妹うれしうわ
松風のうきよりくる秋もよかとび人の歌うりを

六十

かくゆふのうのをとせらてぬこと、風のすまよゆゆる
開未奈イ
あやまくにのほの世の防あさくぬものひまがまく

久木押すにばのちもく集
詞花冬
あねこ姉兒
新六帖 知家
多きて、あねこねやうすき
くすきまの風、をそそ
えをいねのちよ傷
よまし、まことやうす
あるてあねこねの秋、
れ本物の傷はわすま
今ハ奇十一月神祇のじと
くわぬ御室ときと
あらうとくわぬ御室ときと
廣田松谷 仲綱
あらうとくわぬ御室ときと
さきのものむきよま

久木押すにばのちもく集
詞花冬
あねこ姉兒
新六帖 知家
多きて、あねこねやうすき
くすきまの風、をそそ
えをいねのちよ傷
よまし、まことやうす
あるてあねこねの秋、
れ本物の傷はわすま
今ハ奇十一月神祇のじと
くわぬ御室ときと
あらうとくわぬ御室ときと
廣田松谷 仲綱
あらうとくわぬ御室ときと
さきのものむきよま

新古今春

六十

寄表、意よて實べ述懷
新古今春
契沖浦の改觀聲

まろすと角り一袖中
抄よ枕あるをうちのまちみ
る時とぬそもせば、ひそめき
とそそをもひのくわくち
のまちうそとひやくをすらむ
陸奥の地名えどより又同抄
於昭一説とて其のまちう
きともてまちうそこと、まち
つうへれうもじうそとをいふ
まちうそとをいふて傳
つきうそとまちうそよりい
ゆく

此奇也之氣

君はすがやのむちか木
おひじてあやめのやどりしとおへあまよねぢうよ
あぐちもむだのまともアリ時をひゆげてハギハヤヒキ
あやめのほのたとえとかくらでうくゆくゆく
わらしきれがよよすわいわあとああ人をひきり
もうるいぢよごんじなど教わぬをあひな
ゑふとめじよ身とゆきてゆのあつる所とな
ゆき、新すのまくびとやくみよおわおわ
秋本ほひとせなぐととあがあきつてもおおきに
秋本ほひとせなぐととあがあきつてもおおきに

名七六

序
これも此天のいたの時代より人の手はまつた
よきもの多く。多くとせば多くいふ。さて
かくよれどおほくのこれらものにはおもやうことを。
すまへ

是よりト三十首ハ古今
集の序よつてかかれて
あま山のやく歌を専
めりてゐるなり
是よりト三十首ハ古今
集の序よつてかかれて
あま山のやく歌を専
めりてゐるなり

わがへと歌くゆるはあしばたがまうきて世をよみが
藏イ
ひ、イ河をせまらし成られゆのあしはゆくかづれ
教ミかぬミせちよぐまミとすのぬけミれを
八橋ミのすよやとよふ神ハ源のゆもとミた
松の葉の緑の神ミとすきよきよきよ
かゑりの宮ミあもつてミとす世ミううじミ

京本急三 業平朝臣

業平朝臣

古事記長奇 忠岑
かうじのそじせうきて都波
の國ふよみ波の波のあきと邊
むちねん云々

拾遺集卷三
季のそよ風にやうえ小夏
まうすまうねよひよへめん
小町奇集よ
春のめぐらもまきえて拾
ひくとみまうるをとけあ
けをせまほる云く

まよとひしらぬ御身を致くまよが是故もまよくあつめ
ゆはれやかづの山^{やま}かづての山^{やま}のかかはざりや
縛^{むす}じやせつ^{せつ}よせつと見しれとてさすよし出
すせまたも桜^{さくら}も代^しきかわらきわらかみよ
夏^{なつ}かわらき^{わらき}とく草^{くさ}くさきよふまみひそ^そ
やへむづき^{むづき}とばき^{ばき}とく草^{くさ}くさきよふまみひそ^そ
丸^{まる}小^こ葉^はあはげ里^{さと}の家^{いえ}のまよひとみよまぞまよ白^{しら}衣^き
のまよおわゆるやまよ本^{もと}の木^きくふわふ大^{おほ}和^わなぞと
ゆごのひよふあふまよ^{まよ}、^{まよ}きとまよ^{まよ}でとまよ^{まよ}のうゑ

後生のつのもうの罪もあきうきせり、仕事、あふ危
續後拾遺雜中

あればとある事のゆゑ身をもつて仕じぬやい
沢田川あざれて今ままで、往よえます。此のうちも
茅あさを伏えの裏あれぬとよおせのえよなれぞ
不ぢよきやまびて人とまわくからむをすめあれ、
ひとすき間のあすづきほの危とぞおひし滑ぬる
虎ちのふきすわざれりて、下らぬ地とぞおもへ
ちりぬ命こうかがひ、ありばるむムよわせりやと
おひやうづれ、どあまとまよみだときくがわやタチ
をうぐやく浦よ浦よ浦よ浦よ浦よ浦よ浦よ浦よ浦よ

後拾遺集雜五 入道前木葵臣
翁葉つむうをうのゑひよき翁
ふうひとうすくもやる

金葉集 意下 よし下へ
よし下へ あきあはるはく
あまみちわらわらうす

左のまへよあわへとひへわへとひてきへだや
をとくやよ今へうさうとみかうせあくすりかくへと
飛びしき 級の轟うあさりふそびらわまくほほのまくは
かくあくく風車のまくはくまくをあぐれ世へつへ
揚塵あくまよもむかわあらんとおよひば
ひのえ

二あよてわが引く 杉のまくはくまくはくまくはくまく
きのと

續古今
かくあく地へわがうとひまくづきのとひまくづき

ひのえ

音七八

あふまやちよ松原まくはくまくはくまくはくまく
いのと

教あくをやく教のうきよかくはくくわあくばあく
ひのえ

小ひ田のむづらのうかよせねくまくはくまくはく
つとのと

金のまくづらのうかよせねくまくはくまくはく
かのえ

黄代わわじとおよめめやかよかひぬぞうき
ののと

人事とわざのとまつゆよがむに神ハおひれまつゆ

みのえ

ひみのえよしわがやいのあれとよまざわらや

みづのと

をひきゆのとまつとまつてゆきてひきゆとごゆ

一日めり

和名抄神靈類六天白神新
撰陰陽書六天白神和名
久比利

金葉集應下^{アキシタマ}トマ
君とまは萬葉下^{アキシタマ}の承とま
かとあくすのうとまかん

古今集雜上^{アキシタマ}トマ
いやのせやれとまをれ
ものとまくへとま

一枚カタ

ひくわくとまとまとまとまとまとまとまとま

ひじり

たてのうらやまよおやびひへあきねとまく

みづみ

續後撰雜下^{アキシタマ}好忠
沼のとうみよまの浦のうとま

みづみ

人まなみのめめせやよわる、あふとまく、あくとまく

ひづみ

神御アキシタマとまとまとまとまとまとまとま

に

そほみのうとまとまとまとまとまとまとまとま

いぬる

後拾遺集憲 藤原國房
かとれ神の浦のうとま
わきまよとま
古今集憲二 トマ
わきまよとま
ひきゆのあくす

山伏もまたかくかよまひぬかでの體よりとゆかは
まへ

いもをあきだのとよびがよおはげづよ老を一はる

雜々記云曾舟集五首
歌とぞあそ初の奇の歌とぞ
の奇の詞を次う乳の初比
句よくわざを云り

按此つは奇ハ初の二首
召よ今一首もて五をなす
しの脱身すまで一さて
第三そやの奇ハ初の歌の
歌の奇の歌の一章を限
て初みまのくらもの
序はもすまでさてモ歌北
総の奇の歌の面あると
ううえ一あさておとせ
がよを秀の三字をとす

世やとうとく行財もありすんやぞうづふさを
つね

夷をとあぐわががくよか／＼とくせふが神とす
拘もひつあややの軒のあすもあをゆく海よねと私也
多びのかひりと世とるくまやまきの鷦と鳥もくし
未勘

わくとゆひとどして富士の今よすまみば竹のつを

房融院の宿の日めあくてあゆうたとせり
なましとスの日ゆく

多は三字をとす
ウニ子をとせむまを
あとわく一又神を
のまへわくと私也
うと今ハ余をゆく
おきつ

成取同融院の宿の日めあくてあゆうたとせり
ゆあて一ゆきの事とま
をあれり大簇威ああ
全昔物達すまうき
成トて書うへ上ののと
佛とくふみをとせり
おとよきとそれ即
つねをも次下みあ
おとよみで一ゆくね
おとてま

はお次の方の次を考るよ
谷川の波とある

雜記云此う云ふ
まハ順の詞すて既も順
の歌へ玉葉スハシモ
の本の集より
よきあそぶ

世のよきよきがおぬしきのほれてもぬよに乃
谷川のあみの歌よもぬにて世よかくてももすのひのね
佐のむねが緑の被あぐ衣とよつぞねをねぬよ
身りやねとばづくまぬせなりた烟とさばく人のよ

これと見て序の順がかへりと見え

順序
ひごろとくとくとあむう。うとの風の天の橋
三つうよ。中絶て絶によくまつりしわう。う
もあくぬ。うかくやまとくとくとくとくとくとく
とくとく。うかくよせひるまのよわう。う
つよする意とあらわすか。う。うやア。う

のあれゆきまう。新郎のれがたるやまゆる
ちくはせとあとくわう。まのよれをう。まゆの
あとくくとくとく。よまかうかくの歌。まゆの
つまくわまの歌。まゆの歌。まゆの歌
ことかえず。あくとくとくとくとくとくとくとく
とあるうのうきう。歌と接し音とあひて
わくの年とほんじ。かしきと音とあひて。れ
どねがわくわくのうきうとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

たまゆるやとひを。ひのくちもよとい
あてだよ。かくぬせとあへとあくとくらうあれ。
おののかくね。このおとくね。おののれと
のせ。月のうさぎ。うさぎさん。花咲き
わくわく。うさぎの秋のうさぎ。うさぎの
ゆのゆ。うさぎのゆのゆのゆ。うさぎのゆを。
まのゆうとあれど。今、時々のゆう
うのゆうゆうとあれど。うのゆう

卷十

まほのまほへまほてまほのまほのまほ

うねじるやのよゑとよゑをむらむらする
東風のゆきうつたのまへがねんてひづりやくわ
ゆるたのせうとせうしまへひよゑをもどつみぬ
えきせ、寛のゑあむかあくよれかくよゑとあくよけの
子月をみだるかくすれ続がくよせすれめよ危
花はよきとせせしもれあくよせすれめよ危
浮國りぬ、ある葉の葉われはくよせすれめよ
立葉のゆきうつてよおきしがくふくする葉くわく
ともほれがくよまどくよひがくよびかくよめとく

卷十

よ、とくにまえまへむよじとくすまくことわれ
はきのいふとくとく、ばあのもとがそよびさのと
大あとの小舟たぐみを浮うきるまくらミク
そせと余のひよがぬぬとみよのあまうし
みをかほがのひくひくねねのくわくくわくくわくくわく
續稿拾遺集好忠
タヌキよのきのひくひくがふくつまれまれてくまのきくきく
若狭わかされよはくはくておきわるふやはるはるけ
育いくゆきあひの度たどりよきのあくちをくくがくく
多およやうれよくくく有あのあくくのまくくせぐやもくく
たすよれくくく有あのあくくのまくくせぐやもくく

秋十

秋好忠

秋十とあれども九首
一足脱せむを
千載集秋下 加茂威保
吹きまくる作り空をうなぎせハ
きのき風もおどりよろこイ
新古今集哀傷 爪巻鑿合
あり悲しきうきはとあうり
翁かむ翁のひるといふ
古今集詠詣 兼輔
トヤクとまくくらとをま
天のくらをとあやまうえ
家持集
ワキとのえの声つきの木つ
つみはやんじゆめくわ
チ左日記云白散をあらもの
あまとて、あやまことさー
をきわづれハ云々

秋好忠
秋ざすのたらふるをぞくとすよも風さくれりむ
せぢがせてま見えや那のいとくとわせるゆのゆき
花きやすとまざり老かぬめ秋よまげるづきあよ
山里のうづる今、あぐらかみゆすすり袖先もやう
ゆあらの森のうそよ重るか、厚のゆたかくま
松人のあくまくせば秋ひの朝晴も今はお葉落とす
志れか、ややのつまはき、れがすすめや思ひ出ん
秋音をづきゆく、思はずかばどよみのつらうすせ
あるひとあれどもんかくよほくゆめ秋とすつま

卷之三

卷十

古今春上　吉生忠岑

賣古今憲一存忠

紫の内は花候も色もあらじ事頃ゆふまじておれ

未勘
取夫未

の所考も一くち
いふのあうる教示ハ近江
夫木世 鴨長明
桜田山人、うゑのすもきよよ
鶴風むみを多一
万葉四 門部連石足
まきさきのあうきはまくを波
さかてもぬてもにわゆるる
古今集意三 よまえトシ
りこづよあきそばらすもの萬
とせくわざよいかれつて
古今集序云ちきふし禁
のうちへちよひあうて云く
白居易坐右銘曰千里始
足下高山起微塵云云

あぶれといふの外からぬのであるが、いはゆる
おびとてども、世間よあへぬとてうるさい
それわたくしがよもや

これ、わざわざおもてなし

あさりすとあさりの花はあてやんせどもあら
川せの煙木がれくもほくようまのく
ゑをみてる、またぬたかくのうへひす
さとく様がうゑ、ふうへくと、それどちくぬうづ
卷かれて枝ぶくろをめぐれまきゆうひよ
やも火の下よりえてあやめやわせやくらぬ葉の下
うすくまのねなるかよひゆくありびやくざる

古今集養より不^レ
宿をく樹の風陰あも美
まつ人のもとあるもくれ
同春下 日
うなぎは世中もすらきやせ
きくとよりあらうぢづにう
古今集意一より不^レ
やうきくわくや育のあめま
あやかしもくぬ籠もむられ

さみだれねに雨と私岩のあく鐘さよろしくや
へまよおきだされ御波ほの音をひくわまよおきだ
御あらまを拂はくよみね下まのけきえむ比
ひまのこそすうそ先へ氣し秋のそぞがよがくまく
まのほやさくらあさき、遼寧まなれあよさくも
やきゆの都^{びちい}と秋の秋^{かへり}花そくひくと
待をよめり、秋^{かへり}よめくごまく秋^{かへり}と
まもとをよめく、ひ風^{かぜ}をつたづくとよめく
ぬきよの水の音^{おと}まくみ、あまきよれ、おもじを
おもじゆくめ

後撰集意五
相あらかきあらかじめあらかじめ
ほきあとやをあとや

後撰集意六
相あらかきあらかじめあらかじめ
ほきあとやをあとや

わのとくへやけば花なりふ細くもゑみくとおの
ちきこすもえぬらやどまきて、わかつむべき處うの山
る美へうそ、人梅花など、あぐらうるくんしを
新續古今意三好忠
をうらぐる人、の程はすれどまくやえゆゑがれむハ
れいしわやくわとやゆむねぢやざざくべる
時のまくわらわ萬きにゆくのと人とこそおひへ
初きのまくわうづるを下すとぞあくわら人
やくせせりばとじてあぢきりくとくをむすめりく
字ひよなごきる事へ事も共、相もあゆめじひとたく
吹ぬのよつて、空そらのみをもうこうぬかとおひや

わのよつて、きよひて、まつわぶくよすせよ、梯の葉
のびるあるぬ、そばく、葉のひづはぬ、くわらひの
かく、のとおせば、まく、よさわとつる、おうし
も、やまくよとつらうり、みをうあくよこく、よこく
きる

後撰集意一
ひと人の仕あらかじめ

國の浦のまつて、と人向へきのまくじよへあれるはる
さと
い乃え
ひのう

ひのうとくとく、かのうのまくをぬやうとよめのわらひ

ひ乃と

續後拾遺物名好忠
れり 来

わがまをもすのせよ
わがまをもすのせよ

じらのえ

花事子まきさきのを
いはる條子云ちあもな

つらのと

内かくあまきのれむのね
わがまをもすのねづく

かのえ

花のれむとまゆわやくばくまきとわや
まほ

かのと

今ほまくまく今うのびくふくとうとせもぐらん

著批七

みづのえ

けあぬく

みづのと

まくば先松うき あらうの木底
カタ

新羅舞

ひきあらうがくふくまきとわすくある命とあらえ

一日やぐり

れぞしやぐりとせんざよかくひほ

一束やぐ

さもの今あうてゆかとねえのどおうとく

ひ葉意一順
だたればらんかあるわすまのあうとく

モツ

順家集
あらわしたまき
めぐみのむね

かくもあがむのひよ候花び音便こもちぬづされ
みのと
あらわすとよざるやまとくせうじごは
むべし

玉葉意四頃
ひよまつむすめふさわく象とやけのたゞみえ
に
いぬわ

当社八

世中よがみのひゑてゆきの枕あつらを
ほぢのあやうとみかみすと秋ひ人すよかしづば
けかのすとがくとくとくとくとくとくとくとく
詞花雜下
あらわすとよざるやまとくせうじごは
朗詠

万葉二有間皇子
志白の淡松枝叶
あらわすとよざるやまとくせうじごは

補遺

- 拾遺集卷第六別りのまよふる人のことよふく
まよふてかづけよく おのれのくく
馬がねのかよとしけばおほほきみせんもにわよびりご
○同卷第十七雜秋歌六帖 おのれの忠
まよふぬまよきのまよふ秋のまよて思はまよふ
○詠花集冬歌六帖 おのれの忠
かゆあるまのまねよ雪風のまよすとぞあそちゆき
○新勅撰集春上歌六帖 おのれの忠
おのれのまねよげとすのあたごまのせべ

は弘家集よやくて、帖第十五機のまよふく。袋を
あるとじ。おもむく何ようておなが奇と
あるとじ。おなが奇と

○貨多事云。旅宣集云。妻の日よりうどある。まよふ
ずまうぐさくとてのとゆふよ。おもむくとてある。
とて。丹後旅も詫めか。かづけとてらへゆくと
象ととが詫白の元のつうとてまよふくとてある。

也

おもむくとてまよふくとてある。おもむくとてある。
おもむくとてある。おもむくとてある。おもむくとてある。

董之集の歌
ふくやうづのまの秋の歌
かづきやくさりとす
曉のまゆよくねるや
ありとせまくねうて

右此一役。流布社宣集不載。之は上多々今考か
る。重え家集云。之の事。たゞが。たゞまか。いづの事よ
て。かのうれど。つとめあとつ。ぞ有歎ニ。言略之

○夫木抄云。かく直きと承りやうある要法師
万代
わづまぢよまゆきゆ人をひある是因の事よも葉むづじ
○圓融院寺。す日せみつるよ。やくあきよまゆで
といふゆれゆきよ。づくがり。此時のゆだ後よ
く見えたり。かくは先祖事祥。實方大徳也。因よ
うそせ人のゆきのゆよひるくあり。ばか葉。序よ

中よりとてよめり。玉葉集よりの歌で
載らるる。よくよきとぞれ。はかのよしとぞ
玉のこゑをわすとす。下三きの事。後のもの
じてふへたがり。はやハ下のをも流してつづく
せ。と。又ある本歌を、異同とほし。拾遺集より
こゑ。新稿を今集よみます。十九代の勅撰
よむる歌をほし。か。おつとあきことわりうる。
あきよす。することあれど。ひきまき

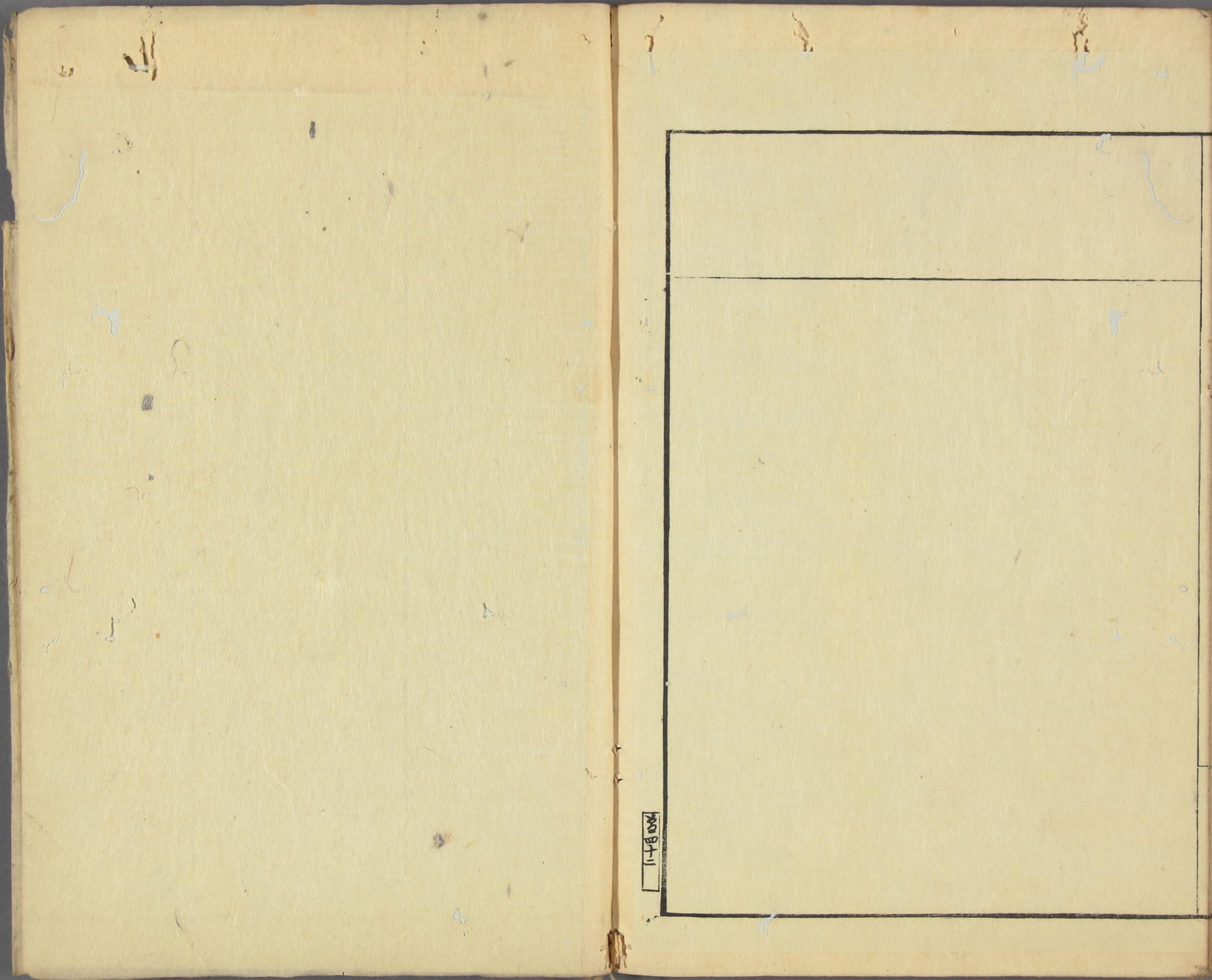
○再考補遺卷末抄三十。寛和歌合

ねむ集

初一。うちのひ黒つあんきもんさへや。神のひづん

此歌新玉載集を部よ。寛和二年後上焉

合よ。まへきびとある。



١٤٦

